

大政官文庫

和	一	一	
書	一	五	
門	〇	四	
	六	五	
	冊	函	號

內閣文庫

和	一	一	
書	一	五	
	〇	四	
	五	六	
	架	冊	號

內閣文庫	
番號	和 11504
冊數	6 (3)
函號	211 84



新著聞集

勇烈篇第七

凶年之厭ひる親子水子没す

佛船和尚句吐庫賊

鯉婦狼と害す

童僕辱と過自害す

美麗少年義と思自殺す

殆力重擔耳力得金

童子狼と害す

清印

文庫

文庫

信州

女夜盗と擒

寡婦夫の奪鼻首

愚吏童と誑て被レ疵

信州高遠大蛇と斬害す

老父圍碁聞二子友

虎勇威をたてし

讒を討身を立て

幼年人討義成

乞人理不伏して火入

携支搜り上子大らり嘍と截害す

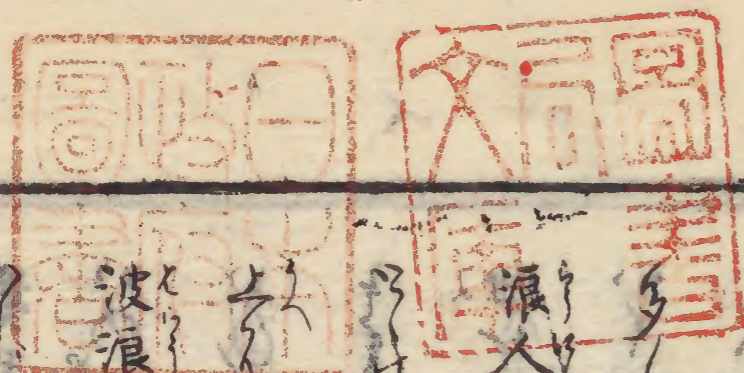
父不望して睡り熟く肝臓不毛を生ず

六鎗扇たてて弄ぶ 犬虎不咬

至心火定身義不乱 壯夫自殺遺書詩歌

高屋権太丈討倭者 積聚と截獲長壽

少年乃矢數



天和乃く先方はきき、飢饉一餓成り者都鄙に

多し、乃て戸を必掃乃ほく、時、徘徊せ

浪人たりし男、幼きよと伴い、携はれりて糖を

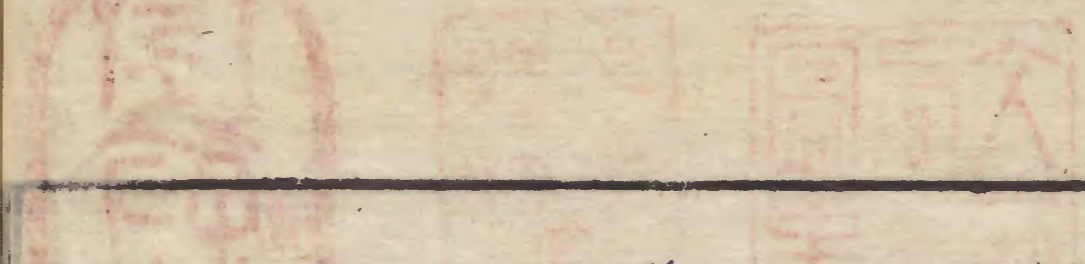
食む、其の世を、暫く待て、そは、世の、方、橋の

上り、舟り、かき、く、た、ら、廻り、し、を、合、せ、浩、く、る

波浪れ中より飛入りしと、往來の人、な、く、と、云、し

誰も、て、引、揚、る、も、か、ら、じ、に、送、り、水

底、力、を、た、げ、と、り、し、真、切、り、て、筆、高、き、翁、の、頭、ハ、雪



横巻開卷



て載き腰ハ了て張色をらく瘦むるへ右乃存心ハ
數珠をもち左乃もくハ杖をばき、もるほい素て
かの幼きをねて入てマシ親父ハいけさへせし
りひく橋へ起き、往來乃今マアあつくとすて
そとハ自の子ほていありも昔時ハ免られ此もき
世と憂ももつりぞ書せりうけり我母ハ旬少
かく幸す世うたすもやうくありしや母言嘆し
多ふりもあきかひ孫と連出く百がう不審
けりひて海と遊くころなきまじしふねハさふて

しる暫く待て、冥途黄泉まで親子れ契争て
おろれめやといひ果す漫るる中に飛らした
及び父をばし袖をさぶりあり凡そいふは
乃衰ハ多かりしは、おろるるのハ歎ひ侍らじとせ
佛船和尚句と吐て賊とるい

上州大久保村乃龍雲寺へ天和三年十月に盜賊
入りし時佛船和尚頓て起出、ぬい竹篋を持偈と説
け今朝起出、小龍窟、脚下分明、十月天
凡俗不知、之一句、白雲不礙、四禪天

云云初ハ賊徒ヲ無二無三ヲ打盡シ一人ハ
即坐リ歎可殘黨ハけいぎにひて月恐もあらなくに
逃去リ和尚則ち竹藪ニ成骸アリ袂ニ出院
たすけけりまひ死ハて殊勝乃働り飯寺
まのて再住けりしと也

鰥婦一狼と害す

武州榛澤郡いむ村乃左衛門くひ者耕作に
出テ狼ヲけい教ゆき一ニ十歳をぬけれ妻は年
口惜みのにけりいむはも一を狼とけりあらるるて愛人捕

乃在淫を提ち方くと殺求りけりけり時大なる狼
一ノ五ノをまきまき乃のききと悦ひけり件
繪とけりけり咽とけりけりけりけりけりけりけり
怒て起つぐんとせりけりけりけりけりけりけり
聲とけりけりけりけり馳来りけりけりけりけり
てけり舅地の志乃貞節かりて感一聳とけり
家とけりけりけりけり

女夜盗と槍

江戸堀江町乃氣やへお登入り亭主と切り殺りけり

妻起出て聲と立し盗人逃出中戸を叩く
妻を逃るる足と捕へて引あつて戸を叩き
盗人ぬき倒さしうは頓て壓へり大音して
生捕はりと叫びし人つり向て掘あけしものハ
王子乃と樂寺乃任給と殺せし古著長左衛門と
り強盗つり無子寺ハ女れ伯父なり夫と伯父の
敵と女れ力として生捕ハ因果れがまじり及ぼる
りも勇から振さしやと誉感せりるハつる
童僕辱し遇て自害す

神保左京直殿の家来黒柳仁右衛門といふ人の相部屋
乃何氏物矢りしとて遠くを去りて詮義社男
召仕乃小野即ち縄をかけるもお外より女
あつた後少僧帯のいづく我財しやいかに
しに羞むるまはかく縄めれ耻し逢ねるもの
口たさよと獨り言して恨しと傍輩の向りて
少も恥辱つらふと揺らり教訓しあねど
ひさすにねのひ究めしははめり自害しあり
かく身乃猛き志いさへる先祖と想やれりと

人々は行はぬがかりのかりしとらん

寡婦夫の鼻首を奪ふ

大坂上八町目札乃辻乃町一鎗権藏とて溢者五七

博奕人の人請りたるしおれのおと人欠落りたる

と主人より崇りまのまろをれ罪科きつゆりて禁

獄しほめりし鼻首を奪ひたるまの妻を奪ふ

とせし成人乃子を唾ふを母のま交はしてゐる

か我がくして何の上の親りたるはやまの頸を晒

しとまん其心憂しと今宵頸を奪ふ人なり

何の事か子と日を毛の程のゆかりのまを河の儀乃

恐きまのりらまが叶のゆきと一向のまを

東へく更て子とねし霄を吹りしと自らひん

りたりひきつりして目物もあぬ黑暗りて

すくと獄門場りてり何も懸りし頸を採

りて夫の頸ハ異人まのまを大まをて京にして難

くおどり少後乃寺町乃菩提所をりて頼て

火葬しありし後かめを流せしとまを人を地所

りて足付て後かめを流せしとまを人を地所

脱(ぬ)げ腰(こし)一文(いちもん)をとり切り通(とほ)し控(こ)れ刀(た)とけききり
 灰(か)いぬ明(あ)かりに書(か)き置(お)き乃(すなは)ち一巻(いちまき)をてやちり筆(ふで)して
 朝(あ)すれ毛(け)落(お)ちし命(いのち)せらるるのいひれとちり落(お)ちし
 てとりし至(いた)る助(すけ)けりも嘆(なげ)き堪(た)まはらぬ護(ご)國(くに)寺(てら)に
 刺(さ)りて我(われ)心(こころ)より出(い)でしりぬ増(ま)す云(い)置(お)き自(みづか)し害(がい)
 せんとしちり喜(よろこ)び母(はは)及(およ)び親(おや)族(むらじ)きつちりあき
 いひぬおし止(とど)めしう心(こころ)かかくて髪(かみ)を刺(さ)り高(たか)野(の)山(やま)り
 ぬがりちり跡(あと)を吊(つ)りひちり寛(かん)永(えい)十(じゅう)八(はち)年(ねん)秋(あき)乃(すなは)ち
 りりり

思(おも)ひ童(わらわ)と誑(たぶらか)して被(お)り病(びょう)に
 不(ふ)坂(さか)乃(すなは)ち獄(ごく)門(もん)乃(すなは)ち頸(くび)をすくかきし時(とき)伊(い)藤(とう)丹(たん)後(ご)守(しゅ)殿(でん)
 器(き)量(りやう)をあらん乃(すなは)ち少年(せうねん)乃(すなは)ち者(もの)を河(か)内(うち)光(みつ)誰(たれ)ち
 の獄(ごく)門(もん)場(ば)へしゆべきやとぬすみ刑(か)り六十(むそ)二(に)年(ねん)
 了(り)ち茶(ち)場(ば)をすく出て腰(こし)乃(すなは)ち物(もの)拜(らい)領(りやう)しちバ
 けりちんを云(い)ひしはゆばとて一(いち)腰(こし)をりし
 けりちの取(と)りゆき後(のち)乃(すなは)ち證(てい)拠(こ)とねりし
 飯(い)や頸(くび)どの口(くち)より一(いち)の頸(くび)食(く)音(おん)しち
 ちとすしちをさるに立(た)ちんちするちりりり

一口さひくもそむてりや合せん云海に眉間を
めまらしてしてかきりて人何れもちかりしがと
問ふ多ハハ物に似しとふと云ふ多むひそく
動轉くも多ハ物に似しとふと云ふ多むひそく
かまはぶとあかきけりかど定てにそきるん
そし信力者了懸り云くハ伴ひか人を
そし先ハはりそりハにの者ねとけりハ
能て其臺了ハはねたてんとそしに案にお達して
眉間あつての疵で被るのそ世乃笑あつてけりハ

の若年ハ女流乃刀能は冬廣の子也大坂陣ハ後
冬廣ハゆきを多りハはつて終りハをばりしはる
討成ハあつてそし云ハ梨

強力重く擔い耳力得金

勢州松坂乃藤田又ハハ本町ハ國許ハ上る
けり掛あつて田原了りハ町人の名物ハ
かくてハ馬出さしと云又ハ曰くハ利
商人ハハ武士ハハ負てもほりハ
義ハハハ定ハ通ハハ

人々取らるる耳と指しけりて中間入り小判一
をさるる序耳とひき割小判ねりてさるる工八
響へ又響えづんハてぬゆへにその約ありて所
又八分とせりけり力とせり響十に少くも勤
陰よりハ又八分腰入り響とせり多平人
ひきしりど更りてゆりけりしは又八分て金と出
ありてあり

信州 高遠 斬害大蛇

信州 高遠 保科 肥後 守殿 伊奈郡

蓑輪乃中木葉原ノ大蛇蟠 君さるる鷹匠
頭井深九郎 在衛 組下り 告りしをけりし見
置 源くつあへりしに大蛇眠り
斬 斬りて音の白くしりてさるる思ひす
難作ちり音とさるるあれを頼ちりち地
あつちり音の白くしりてさるる思ひす
白き蛇乃立ちるる俄く天の曇り 雷電四方に
ひきりて雨大河とせりけりしは又八分て金と出
あれ大りしとせり急き立ちり 少頃乃ち下

多しと大蛇(トビ)一匹人(ト)進(ト)多(ト)来(ト)たり今(ト)ハ
進(ト)り(ト)と(ト)根(ト)ひ(ト)抜(ト)設(ト)ら(ト)刀(ト)を(ト)以(ト)て(ト)ひ(ト)く(ト)切(ト)倒(ト)す
其(ト)の(ト)糸(ト)も(ト)絶(ト)然(ト)と(ト)あ(ト)り(ト)と(ト)人(ト)々(ト)何(ト)れ(ト)も(ト)漸(ト)く(ト)不(ト)連(ト)
之(ト)を(ト)り(ト)百(ト)日(ト)々(ト)ウ(ト)リ(ト)ヤ(ト)ミ(ト)快(ト)氣(ト)と(ト)あ(ト)り(ト)雨(ト)登(ト)サ(ト)
男(ト)も(ト)か(ト)く(ト)三(ト)日(ト)少(ト)し(ト)信(ト)列(ト)一(ト)國(ト)ハ(ト)洪(ト)水(ト)不(ト)り(ト)て
取(ト)く(ト)損(ト)と(ト)セ(ト)り(ト)暗(ト)し(ト)好(ト)ち(ト)あ(ト)め(ト)地(ト)を(ト)往(ト)て(ト)九(ト)八(ト)類(ト)
ハ(ト)葉(ト)原(ト)不(ト)あ(ト)り(ト)洞(ト)小(ト)沢(ト)り(ト)り(ト)し(ト)ス(ト)人(ト)々(ト)と(ト)
此(ト)利(ト)便(ト)と(ト)ら(ト)て(ト)恐(ト)ま(ト)り(ト)一(ト)時(ト)ハ(ト)あ(ト)ら(ト)ぬ(ト)
童(ト)子(ト)狼(ト)と(ト)害(ト)す(ト)一(ト)時(ト)ハ(ト)あ(ト)ら(ト)ぬ(ト)

丹後(ト)今(ト)山(ト)嶺(ト)乃(ト)内(ト)あ(ト)く(ト)子(ト)々(ト)も(ト)ま(ト)ま(ト)り(ト)と(ト)妙(ト)り(ト)り(ト)
狼(ト)乃(ト)出(ト)り(ト)バ(ト)ら(ト)く(ト)進(ト)行(ト)し(ト)葉(ト)原(ト)乃(ト)女(ト)乃(ト)子(ト)
進(ト)り(ト)て(ト)狼(ト)乃(ト)ま(ト)り(ト)て(ト)十(ト)一(ト)歳(ト)小(ト)ら(ト)る(ト)兄(ト)竹(ト)藏(ト)進(ト)
か(ト)が(ト)ら(ト)れ(ト)を(ト)取(ト)て(ト)之(ト)持(ト)り(ト)し(ト)狼(ト)の(ト)肩(ト)乃(ト)
引(ト)ら(ト)う(ト)引(ト)り(ト)鼻(ト)柱(ト)多(ト)て(ト)切(ト)り(ト)き(ト)
狼(ト)ハ(ト)喉(ト)へ(ト)子(ト)と(ト)一(ト)方(ト)振(ト)入(ト)り(ト)竹(ト)藏(ト)類(ト)は(ト)き(ト)ま
さ(ト)ひ(ト)解(ト)け(ト)時(ト)鐘(ト)を(ト)り(ト)か(ト)き(ト)咽(ト)と(ト)う(ト)ら(ト)み(ト)引(ト)
し(ト)ハ(ト)狼(ト)乃(ト)ら(ト)は(ト)ら(ト)に(ト)成(ト)す(ト)竹(ト)藏(ト)絶(ト)然(ト)と(ト)あ(ト)り(ト)乃(ト)
乃(ト)人(ト)と(ト)走(ト)り(ト)来(ト)て(ト)葉(ト)原(ト)に(ト)し(ト)ハ(ト)難(ト)り(ト)し

病平愈くして後守護乃京極匡膳正殿より
笑して奇特乃都ありて召出されしなり
老父圍碁二子の成てきく
藤堂殿の内より山岸喜太郎同弟在三郎を
勇士のししが太坂陣より兄弟も有りしなり
又岩之助ハ老鉢よりて伊賀乃上野より有りし
何る日喜太郎を討て敵れ首ハ有りしなり
鉄炮より有りて成しありし親乃も成し
きくおとす父ハ碁よりも居りししが母もく

いづくか来りしと個つと捕り父小つと老岩
少して不仕合是非なるを云て碁を
有り相成り人先碁をやめしといひて有りし
たし止りしも故もせぬし母れいよく在るハ
碁より有りしと口説あれども在るハ一昨日討
成りしなり今朝成りて碁有りしと云し
母も有りし情なるなり人々も聲の響き有り
碁有りし老岩のいよく有りし女も有りし
家より生きたかくるなり(も)は戦場なり

刻ハ定ムル事アリテ活テ久クハ能ク仕合フ事
然レバモ場ヲテ遊シテハなほくべき事アリ
之レすも一ノモ噪ぐもきちなりしけれも物
ハ一生ノ鐘ナシ兩オキテ着ヤブシ勇者ノ
待ヤスルアリ

虎勇威テ畏ル

大坂乃塚ノ能テ催サレ一日ニテ所シガ事ニ
ハシテハ虎教レクハ事出ルハ諸人ノ憂ニ
四角八方ノ途チニ有リ秀吉公モ此ニテハ

大名小名モ周章ニシテ事ニ及ビテ上ニ
了秀吉公ハ伊達正宗加藤清正レリ可事
了虎ハいさほひカラス秀忠公ヲ目スル御前
椽ノ翔ラシトシテもたはらす也由ハ志ニ
沖流ニ内リラモ有リ椽ガ通リ正宗清正ノ
了レハハ有リテ兩人膝ヲキテヤシカニキヤ
ラシト由ハ勢出ル虎ノ度ハ何カ也
實テ大勇ノ威ヲハ何カ猛獸トナセられ
ハ感伏セシム

讒と討身と

田中筑後守殿能や一はまし時中百姓はそ侍家
乃袴了足がらまをれを至人乃用夏はあかりて
只今乃より許免可きと懇懇了了せバ了にしも
ろいしびと羨へ一側らる人乃云ハハ免ふ
アセ反踏でも踏てもろろいぬか云いぬに
堪忍りかきて相手の方へゆき様くれらる
討果了へ一覚悟可きとものせうは何分にも
相心ゆいしゆへ一此方より左右へしと

いさ書状調へ置てい讒者此部屋にけき不届の
柄しき云云切報一前より相手方よりゆき
うれえさゆへ能はるる設より末期了酒人そ
三献りしゆへ一取へ大勢のあつち委細とさく届方
る人了訴へアセ反大了感しきぬい相あへて
果もべかしび左様乃者ハ家乃騒動乃本あり
一族ごも意趣となへしとと作らさしとあり
幼年人を討義人
田中筑後守殿家中の子とてり合守市と

何れといひ十五歳なりける者七歳乃者頭の頭をくらま
ありし何れ糸幼きまで士乃面せらるるといふりや
るへきと詞を流しひ地のくら四五日後に十五歳乃
者何心もなく遊ひ居るやするくとも走りたりて
只一討つるきり報しつが家へ返りぬるなり乃
侍りし親へ告あれる親大へて怒るるき相
手乃方へて返りしぬの親は子の不覚あるを
か心のしつりすつりて駈けかきしあの子をひき
家と流しせしつり侍りし一向へ云いと彼子

きく届たつとて養子なりせんといふるハ悦ばせられ
るも善くはし悪くはしつりて其子の更とけりいひ
ぬるハあもつりし只士乃義理なりし流し居る人
あつれ人せらるるて活てハ若らればそははれ自害
せしむるなり
乞人理り伏し火入る
美濃郡上郡遠藤備前守殿城下の寺は普閑
りし相とて雪乃日火葬し居る葬場
乞人妻り供也とつりて父をりしと母は乃流し居る

涙を流しなみだにあはれ宿縁しゆくゑんをあらう今いままで
夫婦ふうふをやあらういはけん今夜こんや庄屋しやうやが取為とりて
非理ひりにあらう虎この餌えをあらう口惜くしやくにあらうか
たあらう物ものをあらう恨うらみあらう敵たきをあらう取とりてあらうとあらう
口説くわいにあらう能言のうげんをあらう聞きくあらうんあらうとあらう
おあらうてあらう上かみやあらう達たつにあらうああらうああらう
衰しへあらうせあらういい庄屋しやうやがあらう根ねをあらうきあらう
刑罰けいばつをあらう作しるあらう犬いぬのあらう吊つりあらうてあらう庄屋しやうや財宝さいほう
をあらう夫つま婦めかけ乃な者ものをあらう賜たまひあらうとあらう

至心の火定身儀不亂

池上意三いさん大儒たいにうの警けいれい世よにあらう十六じゅうろく歳さいにて水戸
黄門公わうもんこうへあらう出でるあらう和漢わかん乃な萬卷まんがんをあらう眼まなこをあらう晒さらすあらう
いいてあらう人ひとをあらうてあらうおあらうりあらう佛縁ぶつゑん乃な巧たくましあらうてあらう
ある時あるとき延命えんめい地蔵ぢざう經きやうをあらうねねんあらうてあらう世よにあらうるあらう
とあらうやあらう菩提ぼだい心しん強かやうくあらうてあらう大守だいしゆへあらうああらう
世よにあらうるあらうのあらうるあらう曾節そうせつをあらう名なをあらう形かたちをあらう桑門そうもん
とあらうてあらう都みやこをあらうてあらう童わらわのあらう凡車ぼんぐるまをあらう弄あそぶあらう
弄あそぶあらう凡車ぼんぐるまをあらう弄あそぶあらうのあらうてあらう

退屈し旧友乃媒りて牧野備後守殿へ百出り
きりぬに極りし故七葉りかく告しうたの
先約ありしおし又くその地程ゆにてある
し極りて好縁のゆて柙出羽守殿へおし
へきり極りて七葉り告あれ七葉内證り
出羽守殿への者りし様子ゆりしゆりし
持まはりておしあゆりゆりゆり元禄三年
臘月廿七日葉りゆりゆりゆり細と極り
も是まきりしゆり頭とゆり討りと留二刀り

玄開り出で足袋り血乃付るを脱りてあき
二人のち出道り木で刀を止るれを賜りしゆ
ゆりゆり極りてゆりゆりゆりゆり一討り
ゆりゆり一人のち手と負りしゆりゆり
進りし極りて推太丈ゆりゆり裏門を出て
便り達せり取へ七葉りゆりゆりゆり
ゆり出南北ゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
伏し下りて家中の面り左右りゆり

追つて一足毛の長道具の柄杓を
取りて半杯下り成す所の古く手負者十餘
人下及び自分も多く痲門番と招き
きくねの事を語り語りしといひておれぬ
か武勇いさる人の末葉とて可畏と云
四代の孫として作りしはしき振舞ふは
多しと云ふ人といはるるは

積聚と截長壽獲る

阿洲安東利左衛門といふ人の祖母三年三葉乃由

甚く積聚しりしやれり看病の者れ隙をうけい
守り刀を以てしりし取て切り破り腸を引出し人
呼ぶくや告ぐは皆人驚顛頓て外醫を招
き腸を引けり積聚を捨て則腸をたれりあみ
療治せりしりしは七日のちいしく動き
後ハ蕪蕪乃しりしりしりしりし

少年矢數

石川備中守殿家信の子梶川勝益十云來りて

元禄十七年四月五日乃言やうと翌日午に射す
了は深川三三郎堂了て半堂を射りて惣教
一万二千二百餘を通り矢一万十本を以てはるいふ
毛射ぬらん鳥色なりしりや矢師より射る小數乃
のりてハ後了射年所をゆが左よりてハ我等
家職のりして強ち了押へしうは是非なく
中し皆く至て至人如名殿及ゆ小まうぬりし
既了り平しと念うてはゆりやうしとて又
百餘を射過しありと也至人斜りし悦むぬり
即坐了百石れ恩禄ぬりしとや

元禄十七年四月五日乃言やうと翌日午に射す
了は深川三三郎堂了て半堂を射りて惣教
一万二千二百餘を通り矢一万十本を以てはるいふ
毛射ぬらん鳥色なりしりや矢師より射る小數乃
のりてハ後了射年所をゆが左よりてハ我等
家職のりして強ち了押へしうは是非なく
中し皆く至て至人如名殿及ゆ小まうぬりし
既了り平しと念うてはゆりやうしとて又
百餘を射過しありと也至人斜りし悦むぬり
即坐了百石れ恩禄ぬりしとや

新著聞集

倭奸篇第八

機嫌妄語

偽金慾人自詐失言

輕蔑の少年即被殺害

佐土原の城暴逆殺傷

寶塔九輪下為鑊子

鄙俗命と損下

不貞の寡婦二盛二衰

狸人や妖一却て取一歩

無根の詈言忽損身命

尾州廣沢親王

佐土海中題目妄説

本満寺像諍論異師

唯今ノ世ト
士族ヲ漸ク特權ニシテ

其ノ下ニ士族ノ下ニ士族ヲ
出仕ノ人トシテ其ノ

外ニ其ノ外ニ其ノ外ニ
其ノ外ニ其ノ外ニ其ノ外ニ

其ノ外ニ其ノ外ニ其ノ外ニ
其ノ外ニ其ノ外ニ其ノ外ニ

其ノ外ニ其ノ外ニ其ノ外ニ
其ノ外ニ其ノ外ニ其ノ外ニ

謝世論

...

機嫌妄語

尾刈松平薩摩守殿の迹從れ士初子と設けし

...

...

...

...

...

...

おぼろしくめづらんとはひひかりしうも来りおぼ
しして身の災いなりけりし
不貞の寡婦なりけりし
信州下伊奈郡下流村の庄屋七右衛門とよ者の家来の
市より女顔なりちりてやけりしは誰人の媒ふてや
落堂大室に嫁入り見へりしに花も双ふなりして
手具足よりとて先衣裳はよくよびて
しきりお世はひらきえりしは終りし方の中と
りて古にりしなりしと又やけりし縁にいきてはらん

原半左衛門年よりゆき友と素にまゝに逢ひは
所方中より歌り娘と設しは夫重た病なり
後より下腫れをて終りおぼろしと後家になりしと
善房村乃百姓より誘ひて貞女に心もちりて
よし小いひのあかぬも皆代よかしけりしと肩
かき春ハ鋤鋤やけりて耕ヤリ秋ハ種と播り
所ぬ拙業より身とやけりしと地
金と供り人ど恨りし自詐言なりしと
伏見のあかぬ屋敷に上りて所方村より老人後

するま 呼ぶ事 其方ハ 落しハ せぬが 黄金一枚ニセ
あると云ふ方ありしを 頓て取て 中んとすに 老人曰
大分ぬものぞ 拾いぬいし するさし せめて 断てし
るまよ 羞致と ばり 某さくハ 飯さぬまて といふと 理
解し 云云 一が 誤りし 一が 金一分 一が 一圓 一が
者も 往來の人 一に 一に 一に 一に 一に 一に 一に 一に
一に 誰と 買ひ きたり ぬと 口々に 云い 一に 一に 一に
せし 互に 一に 一に 一に 一に 一に 一に 一に 一に 一に
これ 一に 一に 一に 一に 一に 一に 一に 一に 一に 一に

み者や 一に 一に 一に 一に 一に 一に 一に 一に 一に 一に
一に 捕へて 道に 一に 一に 一に 一に 一に 一に 一に 一に 一に 一に
先度の 金ハ 其方ガ 一に 一に 一に 一に 一に 一に 一に 一に 一に 一に
金は 一に 一に 一に 一に 一に 一に 一に 一に 一に 一に
と 却て 僮言 一に 一に 一に 一に 一に 一に 一に 一に 一に 一に
一に 一に 一に 一に 一に 一に 一に 一に 一に 一に
一に 一に 一に 一に 一に 一に 一に 一に 一に 一に

程人 一に 一に 一に 一に 一に 一に 一に 一に 一に 一に
下総 目私 法寺 乃日 蓮丸 木像 毎夜 讀誦 一に 一に 一に 一に 一に 一に 一に 一に 一に 一に

と辺の男女奉て詣でたる任お日堪上人心ゆつて
あるお久留の人々先にお像をいひ法問の奥儀を
きつてお返し返さうくお是うおは捨んと責いへば
何の言へもかりし上人頓て斧をさうさうと
おありおれぬ後の方より古狸逃出するて追はめて
討殺りきしころん

輕慢の少年即報害せしは

天和三年の秋吉良上野介殿子息三郎殿お茶つて
追物の侍少佐とておはりし人形おそびて仕さる

奥がたの機嫌よくて悦ひしうとて重ね内おはら取
おへ出されしとて因縁を承りし者少佐にひいひ女
取し侍者くまを君の者の志似とて賜はし酒者
何の流りありや武士たりん者の喰へるは某を
人形おそびぬにもつとて散りし御もあはれと
憎みずの狼藉やもあはれし思ひしやもあはれと
誰ぞのひかからしむし聖日のおり法氣隣の部屋に
ゆき餘の者もまりほのちあつて件の少佐も
呼て一盃吞ちて又一盃とておめられむや侍氣は

終つて砕てハ出さず一免し一處とてせしめ
深氣が白人留しきりし一奴とて絶つて耳
捜えれ少くも吞はしきかた責あれど力なく二三
献傾ちし餘の者ハ砕りし門ふせりし
いとも云れぬる仕散す音の響しし
頓て走り出ぬの何日か侍やぞぐ女抱せしきり
地の隙し少くも深氣が後しはりし
砕りし一奴とて一奴とて一奴とて
亭主立戻りし奴の中と押ししきりし
い合ふ扱しし一が幸意ハ遠くをたし
み合ふ真の親里上松後より一奴
立合少坊とて口書しありに過し日の悪口又
いあより既なる年を捏せし口惜くはり
かた若年又一坊とてしりしがあつて堪忍
けしし今もかくありしか隣の人又亭主
もたせむ故にきりし一人し誰とあんなも
ためしし隣の人痛く砕てけりし亭主
知ぬるし一究竟の時し思ひ定て侍しし

終つて砕てハ出さず一免し一處とてせしめ
深氣が白人留しきりし一奴とて絶つて耳
捜えれ少くも吞はしきかた責あれど力なく二三
献傾ちし餘の者ハ砕りし門ふせりし
いとも云れぬる仕散す音の響しし
頓て走り出ぬの何日か侍やぞぐ女抱せしきり
地の隙し少くも深氣が後しはりし
砕りし一奴とて一奴とて一奴とて
亭主立戻りし奴の中と押ししきりし
い合ふ扱しし一が幸意ハ遠くをたし
み合ふ真の親里上松後より一奴
立合少坊とて口書しありに過し日の悪口又
いあより既なる年を捏せし口惜くはり
かた若年又一坊とてしりしがあつて堪忍
けしし今もかくありしか隣の人又亭主
もたせむ故にきりし一人し誰とあんなも
ためしし隣の人痛く砕てけりし亭主
知ぬるし一究竟の時し思ひ定て侍しし

お意で遂す所多しと妻しく書れせりし先子
負の疵割新しちる方り茶法へ玉柳と玉殿へ可
れ一と告りし小法衆不作法者なりと切腹を
らま少坊よりハ祿所乃者なりと証記す小御
まひりて也

無根の言言ちちち今也損可

江戸下谷へしてある信人(路り)て小使せし侍
人通りて刀入りしし切腹せしぬ祈りては
信人(路り)ハ信人見せしむれハ意恨ちるべき理

かゝるハ自らの料等也とて逃り走り何事か
物のみしけか定めし中め何多りにハ何れ但
いささのりもやと殺りしハ殊りてはわらわの
是より何れ何れと来り懇懇し礼とて別て
希り彼連人ハ一町をやりておまじいへ遊
件ハ荒場と流るる連人ハの外の氣色とてし
乃の云々してマ何事討てけりやハ女ハ
ぬちとて散くして言ひしをいふことハ何れ
まゝの(り)意恨めなきはゆりて討果すまき謂

とまじり我を腰ぬきと云く堪忍なりがうしやを
切りかきとてあせとていんをせあしして討らうい
まうひりよとぬく取へ信人町中の課きとて
翔はあうかひ及しふ件乃人血刃すすけり
あれを云いちらり故すマを道よりするの要を問
むさうくと云く人地を道よりて這る事詞かあ
道行もかくゆはせ首を喫立り王あまをする事
あはれ新あひよるこひ怒りれははくし
我ハ喧嘩の相とあまの腹すくマウ信人白

我の幸ハ某なり信人町中
町人あはる推しめ奉行取すはらう王とてお討し
あはれまうくすあま上へおひきしあは是ハ
喧嘩すくハ何ら乱心なる何れも信人のあはると
信人町にて信らりあまの信人町に

佐土原の城暴逆殺傷

日向佐土原の城嶋信右馬頭殿今てりし金
左膳あは不掙乃心たりて兄右馬頭殿す鶴毒
すはあはらりて遂に去り去りしき嫡子飛弾

守殿家督受させしむしり又延室六の毒を
海りしを卒ししむしぬ飛彈守殿の嫡子又吉郎
殿ハ三歳了りておしせし少く十五歳すその家督を
至胎後乃子息式部殿の御子とすむしく二三年
孫て何多所之胎後家臣の松本左門とめさせ又
右市左の祖交よりし薩州の大隅殿の令抱
松久一式部少輔後見ハ未だ詮なき身也と
是をれを左門子孫領掌中又右家及家老
松本惣右衛門と招き女にむしりしりしや

祖父先考ハ兩君ハ既了り失せしをいふ今ある家の
君と國守と仰きまらるるのゆゑも頼むすらし
至胎後式了後心はよく國とむしめむしむの千秋
萬歳の壽とすしりしむし女ハ子孫すてもし
るるしりし中濃ヤとす詞を續て述しりし惣
右衛門以めおし顔色とくはのり實了りし
はりし少く女ハ似合はるいひのり去りも天
罰乃逃まらぬ而もさるる心強て止しりし惣
一後ゆしりしをいふ密にむしりしより口外を後

翌朝之辰夜奮燈不^レ出ら^レと諸士取巻^レて
此^レの辰切^レも世間へ入^レ頼^レ成^レと披露^レせ^レ我^レの
近^レ従^レ六人^レも薩州^レ了^レり^レも^レ首^レ刎^レら^レま^レり
佐土原^レ了^レて左門^レの嫡^レ三^レ弟^レ及^レひ三^レ美^レと澤^レの
め^レり^レや^レと冬^レ了^レり^レて左門^レが館^レ了^レり^レ籠^レり^レ
り^レは足^レ輕^レ三人^レ了^レり^レ急^レき^レの者^レと^レ討^レ取^レり^レの^レ由^レ
義^レの^レ城^レより^レ下^レる^レを^レや^レ左門^レが^レ極^レめ^レの^レ中^レより^レ
矢^レ了^レて^レま^レり^レ射^レ殺^レし^レ疾^レ地^レ了^レて^レ又^レま^レり^レの^レ胸^レ
中^レに^レあ^レぬ^レ後^レより^レ僕^レ従^レ了^レり^レ了^レり^レて^レ共^レ了^レり^レぬ

可^レなり^レと數^レ多^レの勢^レも取^レり^レて^レ戸^レ板^レを^レふ^レた
以^レて^レ盡^レく^レの^レ命^レと^レあ^レり^レた^レ務^レを^レ戦^レい^レる^レが^レ容^レ
易^レ了^レり^レ責^レめ^レて^レ大^レ矢^レと^レ放^レち^レ燃^レり^レり^レる^レが^レ男^レ
へ^レま^レ便^レり^レり^レて^レ各^レ々^レ猛^レ焰^レの^レ中^レに^レ倒^レれ^レぬ^レ可^レ男^レ
士^レ井^レ七^レ人^レ女^レ子^レ七^レ人^レ出^レ家^レ二^レ人^レ居^レ一^レ人^レ都^レ合^レ三^レ十^レ七^レ人^レ同^レ
煙^レの^レ中^レに^レあ^レり^レ大^レ坂^レ天^レ使^レの^レさん^レ場^レ了^レり^レ大^レ記^レ
り^レる^レ傍^レり^レの^レ本^レ佐^レ土^レ原^レの^レ了^レり^レて^レ件^レの^レ悪^レ逆^レを^レ
あ^レり^レる^レ人^レ了^レり^レて^レ左^レ門^レの^レぶ^レき^レり^レや^レ足^レひ^レも^レん
強^レち^レる^レの^レ地^レ了^レり^レ呼^レ下^レり^レて^レ盡^レく^レ盡^レく^レの^レ事^レ

安穩なるをせむにせむに毒をすめて殺しを
あり又洛東南禪寺に左門に弟れ傍りし
大坂薩摩の益屋安了の門をて兄りし者乃
重逆りて新族出せし滅しむひりし
其も道るべきかかりし合罰りし
しやろもれをぬるのし支了入妙門の
られをゆて構へべきりしハゆきも一姓國
が相まらひはありし左右すべきとありし
その夜邊りし納屋下りて自害せしやも

或はこれと京都に送りしは

尾州廣澤親王

尾州松平出雲守殿屋敷の益々右廣次角兵衛
貞享元年の春卒しぬ息平九郎ハ十三歳にて
儒を學ばし教を讀み跡拙くは也後逸ふ
しかるに障りありて親の忌中より一族と
不通りしと却て幸ありしにありし若き回禮と
りしめ御宴歌舞了りし日息とわたりし十五歳にて
弟の長み人守の難しき奴乃英男たりし

大人の相なりたるに茶道信人の萩野柳意と云
者出の出入せしむる時竊うく乳母の所
し八年九郎の御母ハ院乃官女了て汗騰胎
りしはるる世非く自りてい許う越角を来と
支婦了りうのいぬと委細了りせられ平
九郎幸なり高ぶりしゆらまはひりてはり
いれも左のきりゆせいよく海ありかく
もの夏く美麗と好あり柳意頓て竹腰

龍之介乃系乃青木宗智と云し進付大内より
行ひしはるる披露し頭も道具と拵りあり
ハ金銀の茶碗同く黄若益黒ぬり四足の長柄狭
箱梨地乃長刀の菊桐乃紋と付く冠密
衣その外諸色品とと海へ下の器物衣類了り
ありて是れし平九郎で光仁親王と号し
宗智の姪の十歳了りて姫宮様として種の前
と名つる宗智の牙門前町の古著買七右衛門
と挑園中納言為綱と名つる乳母の所縁の者の

伏見^し下^りりしと御後見^し權大納言^と一^つ柳意^と
正三位^中納言行^兩と名^つ多^し宗智^と三位^法仰^と
安齊^と名^つ多^し宗智^と青木惣十郎^と左少弁^と
し宗智妹^等乃^上畑町の絹賣^{藤屋}平兵衛^と
右少弁^とし^のの^ら比^面以下^諸役人^もと^れく
了^りし^のの^ら伯父^の齊谷^甚左衛門^守付^り
近年^不通^のの^らも^と捨^置か^して^も委^細と
老中^へ訴^へし^しう^に竹腰龍^之今^家素^竹腰宅^{なる}
お^の行^啓所^りて^いま^もも^も食^養慈^せと^しと^しら^へ

足輕大勢^馳せ^かこ^ん多^くと生捕親王^と龍^之介^に
清^河の^らあ^の板^かこ^ひり^し柴^乃幕^と張^まひ^りく
番^人と^付く^らむ^しし^の時^乃歌^り
思^ひま^や八^重の^ら喜^ぶ心^之て^今九^重の^ら名^とる^らは
柳意^宗智^の手^鎖り^て残^る者^もは^しれ^所く^に
河^原多^のり^し柴^山外^記り^しお^のと^し京^都へ^詳
ら^くし^の清^河の^らあ^の穿^議し^しの^ら是^のら
柳意^の謀^計り^し窮^り親^王八^山村^甚兵^衛申^にて
切^腹柳意^宗智^とれ^奈の^者も^も宰^舎り^て首^と

加らき尸骸ハとまぐり了り寺へりしり宅を
毛切腹森佐兵衛と云る者も取持し切腹
せし女もハれりし返放りし
宝塔九輪下て鑑子と云る
石川玄叟後信州松本に在りて王子の宮は
の宮ありて建り宝塔の九輪をたろ鑑子
不鑄をせりしり塔ハはわし破壊しり
かゆ無所の振廻りし故りしれは
家はらび端りしりし

佐渡海中題目安説

日蓮上人佐渡流刑の時、國松が嶺に居る浦にて
洲法蓮の流經の五字と浪り書りぬりし今に水
面より見たりし其の宗の僧俗はのいふは
不審くありし川にありし國のまひりておし
首根より流れて了りしは其の我も及
其の妻に詮義と送りしと更りしり乃
其の宗首の事ありし奇特と云んその處せり
うんく云へりし

鄙悟命と損了

江戸根木町にありし女と云ふ者ハ甚悟く有りし可
長病了して不食ヤリヤリと焼地のかハ更了何れ
喰けりしと妻の有りて悲しく鯛を濁へて料理
せしとみゆりてと云ふ何国より来れると
幸ふうて求しと云ふ何れと云ふ
散く了言ふと隣に妻ありて件乃
魚を買取てみゆりて喰てしと云ふ二切
たうりありとみゆり自ら喰ありお何れして甚く

つてらと絶たすやりに及ししに醫師来て
付と口に入りれども毒を嘔せたりて明は脈を
りやと思ふして目の中も冷しやりにし
アヤと思ふと云ふに妻ありて病人の耳に
口をせいにしりハ振すひと云ふと云ふハ其
何れと云ふて吞りやうり然も云ふと云ふ
茶碗ひがれハ焼くよぬ諦り今三百兩有りし
と後家子と云ふと云ふ録り付るると云ふ

本満寺像評論異師

神木と高くと欲して材没く人歿す

愛宕を凌蔑して餓死す

釋迦の像を詈して顔格子に附く

蛇を殺してまらちら死す

天満宮を廢して七代早起す

祇園御葎の祟

古碑を礎とてかゝる靈魂夢入り

蛇童子とてひ家族悉く滅す

天神の池の臭を捕糞熱して死す

庚申祭の夜幼焚り入て死す

日待り候り誓して子焚りと被て斃す

冬宮の者唐とてひ身や終らして肉食す

惠美酒神石とてひ竹を枯す

高野大師の命了背中火災

曾我の神祠を輕蔑して狂乱す

愛宕の境内を横領して火災

問者の役を拒て脊に腫を患て死す

女人高野山に詣て害せし事

と人々驚き若狢狸の妖怪了やとたあふいしやど
何の不審しきもいふもあらずしうに皆く安堵あり
也の由と問しつりしに其何れもあらずしうに
て竜宮界より入りぬ竜神のつが力を頻りに
まじりて極く論し合て涙を流ししは彼少てハ
一ありと極くいへに扱ハ三の強さありしやと
拍子し龍宮のりいなる主人の問もあらずし
語りの勿きし堅く制せらるしとて初ハ云は
しつ道まがらひりしと云はしと云はし

也のち産し子も兄弟なるし啞にせりしハ
かの界のり語れりあらず其の言交ハ七千歳なる
了て天和二の今の今存ありし

慈眼大師恭敬のりきりて書

に府東叡山了て兩大師の像天和三年五月に
等覚院了しつりしに
恭敬等も海ありしに
召仕の僕了物つき和ひ出我ハ是慈眼大師也
けらび當院了て元三大師沖腦寺にしめ

也の少ハ院至粗畧了りてし球了何の辨へ
 もさき小僧了りて一沖圍たてりて諸人の
 信心もさきくぬれ清意了り叶ハれぬ
 大師了りハ何の清意もたハせぬ能見道
 了りハ成りて怒りて多ク怖れはし
 早く清眼をりて沖圍おも老筆をせし
 せれ了り了り了り了り了り了り了り了り了り
 夢の醒るるるるるるるるるるるるるるるる
 安宅丸の精釋しき人の踏りて罵る

天和年中了り安宅丸の清眼を由きて解はりて
 物れ了り了り了り了り了り了り了り了り了り
 和泉殿橋乃ほ在り市集りて長者板を買求て
 乃了り了り了り了り了り了り了り了り了り了り
 我ハこれあき丸の意らり了り了り了り了り了り
 蓋し了り了り了り了り了り了り了り了り了り
 ちまき一了り了り了り了り了り了り了り了り
 いそぎ了り了り了り了り了り了り了り了り了り
 うは物附ハさるるるるるるるるるるるるるる

柳津の比の奥と毒殺す

出羽の國柳津の虚空の比に鮮魚おひらして
つりし南生下野守の足さきひくひらるるは
毒を流し入殺す一とつりあれは是ハ姓たより
親生禁の比よりしより連ていさめかど候ふ
あつて一とあつて悉く殺さぬ地の日より十四
日より大地震心けりしは山ハ崩れて洞とあり
河のうへて陸とあり衆中より民屋をく
靡類して人多く死す是より程く下野の

家ほらひいさひハかたけつとがめりや

祭ほり碎ねす

江戸下谷の者上野の大師より時をくつり多日三寸と

いさくともそ三は色もあろよきとあ吞てあらし

候りねれ一大師のつとつりほりせとあつた

さきくつり口よりさきあつたかん延室八ののり也

佛像の釘とつすめ忽ち四の指を損す

延室八の月古のいさきの大佛の入佛供養あり

しり大日如來のりしりの釘とつりる

宗心とて入る道心者像の腹肉入りおのび針の
かいら四つ出ると後礎入りてうら曲後うらと
せいかど叶ハ振りしうは腹と立て出たり
堂の上より不品材木落りて指二本左右より
うちひききりてをも怪衣ハ衣なりしりて
さも紅四本うちりて指まきりて不品儀なり
佐今谷の稲荷の神木を伐
かゝる佐今谷のいづるの列尊ハ扇う谷の佐治
とよ者の兼ありしうは社因の神木を老あけり

来るを怪もちく多く切りて置ておの助としりるに
頼てはとがめつるよふして妻子よりにむきしりる
せれごと憂りちるる老年は母はゆい神見故使
おして後世のうら憂ふもあざりしうはる附三葉
りちる孫と切てえせりやうりちる責なりしと
佐治奈何と思ひ事りすや心ゆてを地をを
縁を切てえぬえよとけりもぬを老母何なる
我もゆりハ人の下おハなげりし解あつししき
ゆらくてハ勤士とハ云がしとて西に候なり

其のち延宝八の十月廿一日俄る大雨雷落
つるかの倭と云三つ不引さきなり佐佐成也
程なく自害して歿す
神来と高んと致して村没く火成す
常陸國久慈郡真弓権現の山八丈木稻麻乃
生志ありしやを権現れり
其の事一づと取りておそれし然るに
宰相殿乃法政人下訴へ山乃木を伐て
初出しるはけしき利倍るんとりしに

此の頃にはお義と云りて頃てありし
拾遺松のまゝ入道里河と云取まて伐出
すはまんせし其の夜雨風烈しくして村
悉く流さるりありし大なる令恨せし
由りてありし何と面白くせんとい
叙せしや拾遺松のまゝ山入りて
伐り一夜何と云山鳴谷響く
それららるりしと云百余ヶ所不懸
木屋の人をたらしき噪きしれありし

ゆく神奈川の津とあるもの也といひて何系は
よめくぐきやとて依てかくれる松十余人と
てりて列すまきとて又一松もたをれつらま
きく世にさししは誰とて依んと云ふものも
なかりし山一里むのり蕪冷らまきりにありし
愛宕と凌蔑しして餓死す
大坂の玉置専卜せり人の借屋の泥治や長とあか
日蓮宗ありしころある阿地取より愛宕のれと松
とて土産なりたけりし妻よりそひ載しと長とあか

ぬのわたり噴り松と押おれと引さき溝に
細く取るととりふくみ吹しに右のまに飛火也
しやお拂しに腫らむの堪かて何の
所作もつく日とつひまを運しは朝夕の煙
まきくると妻を離れし其ものもはあき合
とあり別ちを所の立てて餓死せし也鞆乃
飛火ハ常りましるまきとてあ憂り
り果しるハ偏り神奈川を鞍し謂るや
釋迦の像と等て顔移りし附く

此の所蛇今下りけり後集の向の慶養寺に
此の所ししとあり

天満宮と廢し七代早逝す

八條宮の桂川のお業と云ふ西尾海田村あり

近殿のしるるる五林の中より却りて天満宮

乃祠とせしむるなり宮のいづるより

日蓮宗より傾きぬけり破祠と破りて

降りて三年後社堂と建立しぬけり

又枕よりまをかく廢社とにりて崇り

せんともくしるるる驚きよまのあは

遺言ゆりくしるる更すし社堂と

りししは法修云のあは家名と常磐井又

系族とありしりきぬけりし社堂

七代より子孫しりぬけり

徳園社殿の崇

尾州津萬戸四段所の天王社祭すし

りしり八百八の瘦林と麓の中より封し

川へ流す其よりぬけりし瘦林と

神をまじしめのみをりし津鹿薩とて其村其里了
て踊るもゆかりし定室二の戸巴の津鹿樂田
朝も夕も其比白鳥れ大山や仁左のとい者新
幕を捲くしとて人お綴し幸れものありし
備へつりしもつりし亭主ハ大山へおそく代
每人が返着るしはあれ用了し一夜も寝るしお
も人もあつてはれを倒しり成りつりしとて
しりしおれおろしめ人ハ大樂にりしおひか
津鹿の奴原うらわに津鹿かやあつせんてあつし
ふ

會り荒ゆりしお官の終りぬりし又名古屋了
今和六郎と系とりし者あゆりしお白ハおを日そ
兼持村長持寺了りし吊乃齊りししお妻は伯父
中村ゆき年のお父あつて三系もあつてあつ
お人おひして津鹿へまのしんてあつて下人津鹿
ハ薙禿しつりしおしつりしおしつりし強了
しつりしつりし更了り用ひしつりし拜しつりし
お人おつりし俄り悪寒しつりし足るへお重りてあつ
定了りつりしつりしつりしつりしつりしつりしつりし

伊豫國守邦親龍乃池の庄や童地をあらが屋
あハ古下童の好し一倒りとりやさきハ庭
はるる三石天の池なり水湛て旱にも乾るるし
寛永十五年七月五日一在る者も嘉例
ありしてをあらが庭りて頭と體しあるにいらる
るりるらんをあらが婦いりしはせし腹よく
甍り奥のり入に集りあり子と抱て寐る
しりかの子アツト泣くたをあらがはるる
るはるるび子が片腕と舌より咽とわがりき夜と

ひと握り声と立りかど踊れ最中なまこハ暫
り経ハ誰もあらがりしが兎角して人々のあ入りて
らんくす截りねむ件乃者以せりひあらうて
泣くハせあ一人いりしと燈りててくれハ
大蛇りてりし去程くわは者ハらくらり来り
しごとく病りし床のりきし叫の出入りの穴
わり又海の水の砂の上り匍せりる跡より細き
筋ありけりし是をんとそく頓ての程
をあらが煩てぬえれり兄弟をぬえた伯父

伯母は身よりむらさき一族七千余人と申しし
或る教宗よりしは部とふまは八十八集
りて或と逃る阿州へ来ておろし
天林の比多とて一祭焚いておろす
江戸赤松新安楽寺へ東条成宗より人抱ひ
来りて比乃魚とてし社僧の信祐より役立て
神あり地魚と糧薪一きあふるりいよびや心ま
ハ教生とてしはふらむとて理とてしは
親生夢臥の控とてしは許しとて思ふ

細煙とてしは晩より及び海に細家一若黨
おろしとてしは神あり魚とてしは憎くやまら
おろしとてしは罰ありとてしは武も大なり
焚いてしは焚く堪やとてしはて終ふ身内し
庚申祭の夜幼焚いて入ておろす
江戸末次所三町目よりしは和言師の焼法
おろし庚申待しとてしは店の者の妻に
子と連て来りお食の女侍おとせしは
おろし祭とてしはおろしとてしはおろし

かく葡入て或ぬいりしと噪もも丁もきぬりなり
されど彼女をれ龍下をまろし流産せし者れ助
して取らるる事りやのしとく乃難すといひけり
しとらん寛文の中のみりや
日待し何れ誓て子換て被て或す

伊ノ内屋安丸本原無病と云し人日待せりけり
下女髪をばりししもれぞそれけり子ぬて替り
位もろりし人すて位づらぬりせり云れり
下女腹を裂て或も因果マ或失りやせん

言る程りし人ゆつて憎き云るなりけりけりけりけり
然れども取りふ屋きと推しと吐りして下女いり
今晩ハ泣きまら也日天りあて或るせ夜けりしを
件乃子湯玉の何れか程たがうせりる湯の湯で已
マかぐりて焼或るなりと云へ殊ハいりて報り
おもりん怪なきいりて子と殺せりりりり
主人ももろマ何れも終り家をも進出されり
冬宮の者素とらういりて終りて肉食す
伊ノ内屋安丸冬宮の何れか程たがうせりる湯の湯で已

了て鹿を喰ひ了りて又日終て食を喰ひ
所乃筈了て穢土より虫を堀出して喰ひ
人疎んとして滋るハ押原堤了り捨らる猫
犬氣をのぶらる喰らる寛文五年乃らり
惠美酒神居と云ふ竹を枯す
河州和食了り往古より惠美酒の祠ありと
別処了り移りて成て築まると天下一國
一城の法定了り天後了り破却了り阿州殿の老
臣山田織部所地了り家来是地兼地の所了り

君位を以て所由は此の下人了り物つき我れ
は了り何れも夷神あり社と云はれしは
為らるる許了りつ今ハ塚もしり此の所社と移
了り作業了りて憎き云やうやう痛く赤擲
了りても此を以てのぬきまを愛し女悪人あり
つて云了り疑り了り三日中此竹の林枯す
了りと云了りに遠ハで影了りしる教悉く枯す
了りしる皆人たす貴びたを好て頓ておの了り
神位了りて了り嘗とあれん物了りもさあて恙ら

みのまはらむとしをたしし二例乃垢離とありし二
うたはれりし若き僧の水と越毒のしるふと懐し
くたのしるふと神のしるふと抱はるまは後を
笑くすむと理のしるふとあはれぬとあはれぬ
猶ほとあはれぬとあはれぬとあはれぬとあはれぬ
一村悉く焼失しし彼垢離のしるふとあはれぬ
り何の陸のしるふとき寛永十三年十月の事也
曾我の神祠と輕蔑して狂乱す
曾我兄弟乃祠ハ富士乃下野ノ所リシハ神体ハ

兄弟のちり本尊ハ弥陀の三尊あり兄弟の影像ハ
前堂にありしとありしとありしとありしとありし
造婦ハ奪ひ去りし今ハ弟乃福封院に
ありしとありしとありしとありしとありしとありし
射るまはれしとありしとありしとありしとありし
めきあふとありしとありしとありしとありしとありし
ときあはれぬとありしとありしとありしとありし
ありしとありしとありしとありしとありしとありし
ありしとありしとありしとありしとありしとありし
ありしとありしとありしとありしとありしとありし

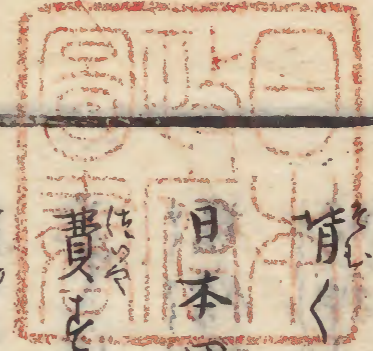
愛宕の境内を撲倒して火災

愛宕山の麓、水尾村より堺根で愛宕山へ上り、
あるとありしに愛宕の傍に合して火を焚き、
かくして火を燃焼せしめてお村を焼く使をせしめ、
取引せしめぬに、同日松金周防を焚き、
穿議の事、村の長本は、火に上り、
火を同意せしめ、人の家も、
飛火して、
焼失せし、
不火何の恙か、
地村の都も、
貪著し

件の公事、何れか、
徒言して止し

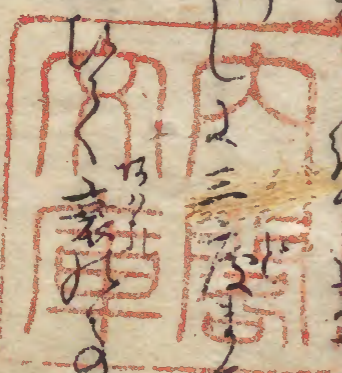
問者の役を拒て脊上腫を患て、
死す

山西南院良尊、博多弘光の、
所、
勸学院の、
問者、
明神、
代、



明神の宣く貴坊とお後して問者に何ぞと
 能くおしりしに新穀なり見小姓とせり来り
 日本國より何の向る大切の山の糧とせり何ぞと
 費もの甚非道の御りなり今助けたりとせり
 大弓に法に射るをも多くとせり人夢えぬ法
 も驚きなりとて良尊と訪まらんに俄り
 背中に腫物いせきして二三日は寝たり遷化あり
 けり
 女人高野山へ詣て害ありけり

寛文六年六月十日越前守と女嬬礼をせしむる
 して道掃除の者なりとて女嬬の来る所なり
 たりとて飯らきとて進中りしとて立返るの三度
 にはびり終るお入り登山ありありとて谷に隔
 り向いの嶽乃松の枝よりかめ女を引きて懸て
 し次の日又お入り頓てお入り懸して三度
 目取しとてお入りして法性院の中へ
 何れとて念じたりとていふひり
 何の所なり
 かかりしとて風ぬとてく及下りてお入り



Handwritten text in vertical columns, likely a list or record, with several red square seals interspersed. The text is written in a cursive style on aged paper.

